

# 平成24年度資源評価票(ダイジェスト版)

[Top](#) > [資源評価](#) > [平成24年度資源評価](#) > [ダイジェスト版](#)

標準和名 キチジ

学名 *Sebastolobus macrochir*

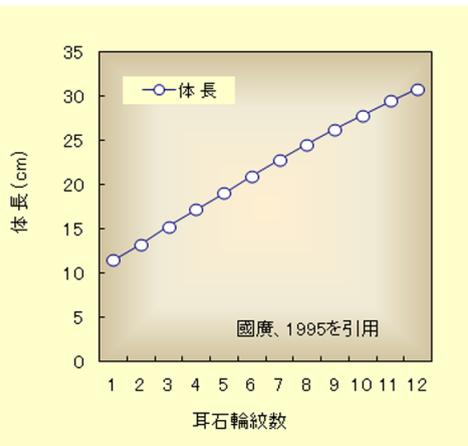
系群名 オホーツク海系群

担当水研 北海道区水産研究所



## 生物学的特性

寿命: 不明  
成熟開始年齢: 不明  
産卵期・産卵場: 産卵盛期は春季(4~5月)、産卵場は不明  
北見大和堆東側と知床半島周辺の大陸棚斜面に分布、主な分布水深は300~1,200m  
索餌期・索餌場:  
食性: 魚類、クモヒトデ類など  
捕食者: 不明

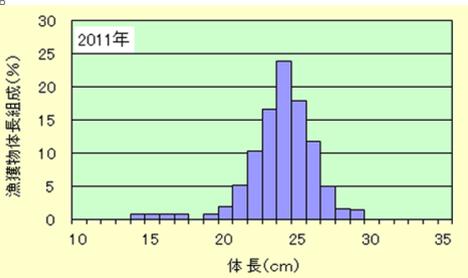
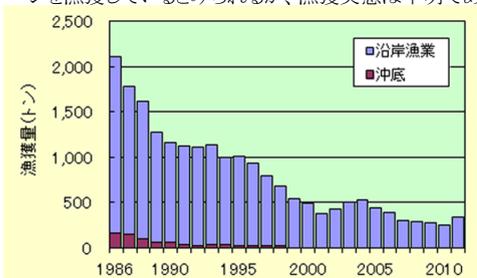


## 漁業の特徴

延縄、刺し網などの沿岸漁業と沖合底びき網漁業(沖底)により周年漁獲されている。近年の漁獲量のほとんど全ては、沿岸漁業によるものである。

## 漁獲の動向

オホーツク海と根室海峡における沖底と沿岸漁業の漁獲量は、長期的にみて減少傾向にある。1986年に2,000トンを超えていた漁獲量は、2011年には377トンまで減少した。漁獲量はその後増加傾向を示し、2004年には533トンとなったが、再び減少し、2011年には343トン(暫定値)となった。1996年以降、オホーツク海においてロシア漁船がキチジを漁獲しているとみられるが、漁獲実態は不明である。

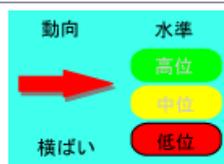


## 資源評価法

漁獲量の年変化と漁獲物の体長組成から資源を評価した。オホーツク海における延縄漁業(知事許可漁業)の2001~2011年の操業隻数は3~4隻となっており、漁獲努力量が安定していると考え、2001年以降の当漁業のCPUE(操業隻数あたりの漁獲量)を資源量指標値として用いた。また、漁獲物(延縄)から採集した標本と銘柄別水揚げ記録を用いて、漁獲物の体長組成を推定した。

## 資源状態

各海域の漁業種類別の漁獲量データがそろった1986年以降の26年間(1986~2011年)の漁獲量から、現在の資源水準は低位(最高値~0を3等分して判断)と判断された。また、2007年以降の資源量指標値の変化から、資源動向は横ばい傾向と判断された。2007~2011年の漁獲物からは、豊度の高い年級群の出現を確認できなかった。





### 管理方策

資源回復のためには、漁獲圧を下げる必要がある。平成24年度ABC算定のための基本規則2-1)に従いABCを算定する。本資源は極めて低い水準にある。未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効であると期待される。したがって今後とり得る方策としては、全体的な漁獲圧削減に加えて、漁獲物のサイズ制限が有効と考えられる。

	2013年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	206トン	$0.6 \cdot C_{ave3-yr} \cdot 1.19$	—	—
ABCtarget	165トン	$0.8 \cdot 0.6 \cdot C_{ave3-yr} \cdot 1.19$	—	—

- 年は暦年(1~12月)
- 平成24年度ABC算定規則が改正され、ABCは $ABC_{limit} = \delta_1 \cdot C_t \cdot \gamma_1$ 、 $ABC_{target} = ABC_{limit} \cdot \alpha$ で計算した
- $\gamma_1$ は、 $\gamma_1 = 1 + k(b/D)$ で計算をし、 $k$ は係数(標準値の1.0)、 $b$ と $D$ は資源量指標値の傾きと平均値(直近3年間)である

### 資源評価のまとめ

- 現在の資源状態は極めて低い水準にある
- 2007年以降の資源量指標値の変化から、資源動向は横ばいと判断される
- 2007~2011年の漁獲物からは、豊度の高い年級群の出現を確認できない

### 管理方策のまとめ

- 漁獲努力量の削減が必要
- 未成魚が成熟するまで獲り残し、再生産に振り向けることが、資源状態の改善に有効であると期待される

執筆者: 濱津友紀

資源評価は毎年更新されます。